

日本語から韓国語へ移行する学習者達
—香港の成人学習者へのインタビューから—

The processes of changing the target language from Japanese to Korean:
Interviews with Adult Learners in Hong Kong

瀬尾 悠希子

大阪大学大学院博士後期課程

要旨

韓国のポップカルチャーに端を発した韓国語学習人気が、香港など様々な地域における日本語学習者減少の原因であると考えられている。しかし、学習者が日本語から韓国語へ目標言語を変えるプロセスはこれまで明らかにされておらず、韓国語学習を始めることが日本語学習をやめることと、どのような関係にあるかは定かではない。

本調査では、香港の成人学習者5名へのインタビューから、目標言語を日本語から韓国語へ変えた過程を質的に探った。その結果、調査協力者達は韓国語を学ぶために日本語学習をやめたわけではないことがわかり、韓国語学習ブームが日本語学習をやめることに直接影響しているわけではないことが窺えた。さらに協力者達は、ライフサイクルや日本語学習の捉え方の変化とともに学びのありかた自体も変容し、日本語教育機関をやめていることが明らかになった。学習者の多様な学びを支えるためには、教室や学校教育といった枠組みから脱却し、日本語教育をより柔軟に捉えなおすことが求められている。

キーワード

日本語学習、韓国語学習、目標言語の移行、多様な学び、生涯にわたる学び

日本語から韓国語へ移行する学習者達 —香港の成人学習者へのインタビューから—

瀬尾 悠希子

大阪大学大学院博士後期課程

1. 本調査の背景と目的

香港の日本語学習人気は非常に高く、日本語は英語の次に最もよく学習されている言語とされてきた(宮副ウォン他, 2003)。国際交流基金の『日本語教育機関調査』¹によると、香港の日本語学習者数は1980年代以降増加の一途をたどり、2006年度には世界第8位となる32,959人に達した。しかし、その後の2009年度、2012年度の調査では連続して減少し、2012年度は2006年度から31.6%減の22,555人となった(国際交流基金, 2013, p. 34)。特に学校教育以外での減少が著しく(p. 35)、学習者の減少は香港の「日本語教育上最も大きな問題」(p. 35)として報告されている。

一方、香港では韓国語学習が近年人気となっている。Kim (2010)によると、2000年前後から香港の高等教育機関や大学付属生涯学習機関で次々に韓国語プログラムが創設され、学習者数が年々増加しているという。このような韓国語人気の背景には、政治経済的要因よりも、韓流と呼ばれる2000年以降の韓国ポップカルチャー人気があるとKimは指摘している。

韓国のポップカルチャーへの関心が高まったことによる韓国語学習ブームは、日本語学習者減少の一因になっていると日本語教育関係者の間で考えられている(国際交流基金, 2013; 宇田川他, 2014)。韓国文化人気が日本語学習者減少の一因である/将来一因になり得るという指摘は台湾(国際交流基金, 2013, p. 33)、インドネシア(p. 39)、オーストラリア(p. 66)でもなされており、韓国のポップカルチャー人気が日本語学習者減少と直接結びついていると考えられているようである。筆者も、韓流によって日本語学習者が韓国語に流れているという嘆きを周囲の日本語教師からしばしば耳にし、「韓国ポップカルチャー人気による韓国語学習者増加→日本語学習者減少」という言説は、日本語教育関係者の間で広く流布していると考えられる。

上記の言説では、韓国語学習者増と日本語学習者減という二つの現象が関連づけて述べられているが、そこにあるはずの学習者の意識や感情、学習者と社会との関係はじゅうぶんに見えていない。また、その点を調査した研究も管見のかぎり見当たらない。そこで本稿では、学習者達がなぜ、どのように日本語から韓国語へと目標言語を変えたのかを学習者の視点から明らかにし、韓国語学習を始めることが日本語学習をやめることと、どのような関係にあるかを考察する。そして、かれらの日本語学習を支援するために日本語教育に携わる者は何ができるのかを議論したい。

¹ <http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/index.html> (2016年1月23日)

2. 理論的枠組み

長年、第二言語／外国語学習に対する学習者の意識は、個々人の心理的問題として動機づけの概念を用いて計量・分類されてきた (Dörnyei & Ushioda, 2011)。しかし、Norton (2000) は、学習動機の概念では学習者と社会の複雑な相互関係を捉えきれないとし、学習動機に代わって、文化資本を増大させたりアイデンティティを構築するための投資という概念を用いて、学習者の意識を捉えることを提案した。

さらに、Kubota (2011) は、成人学習者にとっての外国語学習は投資ではなく、社会経済的地位を確立した娯楽としての余暇活動であり、楽しみの消費であると指摘している。Kubota によると、余暇活動にはシリアスな余暇活動とカジュアルな余暇活動 (Stebbins, 2007) がある。シリアスな余暇活動はスキルや知識の体系的な獲得に醍醐味を見出している趣味活動であり、カジュアルな余暇活動とは快楽や自己満足を最大の目的とした感覚的な喜びの趣味活動である。Kubota の調査では、日本で英会話学校に通う人達が、学習仲間と交流する喜びや白人への憧れなどからカジュアルな余暇活動として英語を学び、言語能力向上を目的とするより現実・空想上の社交から得る満足感を消費していると報告されている。

本調査を行った香港でも、学校教育以外で余暇活動として日本語を学ぶ者が多く、日本語を理解したり他者とつながったりする喜び (瀬尾, 2011a; 2011b) や、他者と違う特別な自分の象徴 (瀬尾・山口, 2014)、自己の成長の象徴 (三國, 2013) などの意味合いを日本語学習に見いだしていることが明らかになっている。

3. 調査の概要

3.1 調査の認識枠組み

本調査では日本語と韓国語学習への学習者の意識の変化を捉え、日本語から韓国語へ移行するプロセスを質的に探った。流動的かつ多層的な学習者の意識の変化と、その変化に影響を及ぼした経験を明らかにするには「人々にとっての事象や行為の意味を解釈し、その場その時のローカルな状況の意味を具体的に解釈し構成していく」(秋田・藤江, 2007, p. 9) 質的調査法が適している。なかでもストーリーを用いた研究は、経験の意味のニュアンスや豊かさが表現でき (Aoki, 2009)、学習者の言語学習に対する意識を複雑なままに理解するのに有用である。

ストーリーを用いた研究は、Analysis of Narratives と Narrative Analysis に分類され (Polkinghorne, 1995)、Bruner (1986) が区別した論理実証モードと物語モードという二つの思考様式にそれぞれ対応している。Analysis of Narratives では、論理実証モードのもとでストーリーからカテゴリーを抽出し、一般化が目指される。

一方、Narrative Analysis では物語モードの思考様式によって出来事と出来事をつなぐ筋を探り、統一あるストーリーを記述する。そして、ケースの複雑性、個別性を描き出すのである。本調査は、日本語から韓国語へ移行した学習者の感情や意識を複雑で個別的なものとして捉え、理解することを目指すため、Narrative Analysis を行う。

3.2 調査の場所と協力者

本調査は香港にある生涯学習機関 A 学校で行った。A 学校では 2006 年度を境に日本語学習者が減り続け、調査を行った 2014 年度は当時の半分以下になっていた。一方、韓国語プログラムは 2003 年度の創設以来学習者が増え続け、この 10 年余りで約 5 倍に増加している。2014 年度の学習者数は韓国語が日本語を上回っている。

調査協力者は A 学校で韓国語を学んでおり、かつて日本語も学んだことのある成人学習者 5 名である。全員、調査時は A 学校の韓国語プログラムに在籍していたが、日本語は A 学校以外の機関で学んだ者もいる。調査協力者達とは、本調査を行うにあたり韓国語プログラムの教員からの紹介で知り合ったため、筆者と調査協力者達はインタビュー時まで面識がなかった。

表 1 調査協力者のプロフィール

仮名	性別	年齢	日本語学習年数／機関／日本語能力試験	韓国語学習年数
Anne	女	30 代	1 年／語学学校／受験経験無し	1 年
Bell	女	20 代	3 年／語学学校／N3	2 年
Carmen	女	20 代	4 年／専門学校、日本の日本語学校、A 学校／N1	3 年
Doris	女	20 代	6 年／大学、日本交換留学／N1	2 年
Emily	女	40 代	10 年以上／A 学校／2 級	4 年

3.3 調査の方法

事前にある程度の学習背景を知るため、インタビューに先立ち、母語、日本語・韓国語の学習年数、学習機関、使用教材、日本語能力試験、韓国語能力試験について E メールでたずねた。その後、2014 年 9 月に 1 時間から 1 時間半程度の個人インタビューを A 学校の教室で 1 回ずつ行った。半構造化インタビューによって、日本語と韓国語の学習動機や学習機関内外での学習経験とそれについての考えを中心に聞き、調査協力者の同意を得て録音した。インタビュー前に英語か日本語を選択してもらい、Anne さんと Bell さんは英語、Carmen さん、Doris さん、Emily さんは日本語で行った。ただし、日本語で行った場合も英語で発言を補うことも時々あった。

3.4 分析の方法

Polkinghorne (1995) を参考に、分析を行った。まず、録音したデータを逐語的に文字化し、複数回読み込んだ。その後、日本語・韓国語の学習動機と学習経験、それらについての考えの部分を抜き出し、出来事やトピックにまとめた。そして、まとまりの内容を一文で書き表して項目（表2参照）とし、時系列に配置した。その後、現在の調査協力者の姿を同定し、どうやってそこに至ったのかという視点で項目同士の関係を遡及的に検討して項目間をつなぐ筋を探った。最後に、日本語を学習し始めたときから現在までのストーリーを記述した。

表2 項目例（Anneさん）

・働き始めて、新しいことを学びたくなった ・特に目標はなかった	・長く日本語を勉強している友達がいたから、やってみようと思った ・仕事量が増え、残業が多かった
------------------------------------	--

4. 分析

本章では、調査協力者達の日本語と韓国語の学習経験のストーリーを提示する。ストーリーは、協力者と調査者の相互交流の中で作り出されるものであるため、現場の記述や語り方の考察、調査者のストーリーも書くことが望ましいとされている（森岡, 2013）が、紙幅の都合上、本稿ではできるかぎり調査の詳細を記述し、データを直接引用することで信憑性を高めることに努めた。短い引用は「」、長い引用はインデントで示す。また、調査者である筆者のストーリーに代え、筆者の日本語教育観の変化を考察に含める。英語のインタビューデータは全て日本語に翻訳した。

4.1 Anneさん

就職して何か新しいことを学びたくなった Anneさんは、言語を学ぶと記憶力や論理力を養えて良いと考え、友達と一緒に日本語を習い始めた。日本のファッション雑誌をたまに読む程度で、日本の文化が特別好きだったわけではないが、長年日本語を勉強している友達がいたので、「やってみてもいい」と思い、その友達が通っていた語学学校に通い始めた。日本語を勉強するうえで何か目標があったわけではなく、「単なる興味」だった。だが、習い始めてしばらくは面白いと思ったものの、だんだんコースの内容が難しくなり、仕事の忙しさも相まって学校をやめた。

筆者： どうして日本語を勉強しないことにしたんですか。

Anne： 実は1年ぐらい勉強したんです。最初は面白いと思っていたんですが、だんだん良くなりませんでした。複雑で難しくなって、私達はついていけなくなったんです。だから、そこで終わりにしました。私の仕事も忙しくなって、私達は一緒にコースをやめました。

筆者： なるほど。じゃあ、仕事量がちょっと…

Anne： はい。

筆者： あなたの仕事量が増え…

Anne： 理由は2つです。私の仕事量と、コースがとても、日本語のコースが私にとってとても難しくなったのでやめました。

その後 Anne さんは転職して時間に余裕ができたので、もう一度何か習おうと思った。しかし、「複雑でフラストレーションを感じた」と述べるように、日本語に対するフラストレーションが溜まっていたので、韓国語を学ぶことにした。当時流行し始めていた韓国ドラマやK-pop が好きだったのも、韓国語を選択した理由である。

筆者： どうしてそんなにフラストレーションを感じていたんですか。

Anne： たぶん日本文化にそんなに興味がなかったからだと思います。音楽とかドラマとかに。そして、ご存知だと思いますが、今は韓国文化がとても流行っています。実は、私は韓国の音楽やドラマがとても好きなので、ちょっとやってみたいと思いました。

Anne さんは現在通っている韓国語プログラムは「とても体系だっていて、ちゃんとコースについていけていい」と述べている。それに、試験もあるので勉強のペースメーカーになる。韓国語は趣味で勉強しているだけだが、試験で良い点数を取ると嬉しいので、勉強を続けるつもりである。

筆者： 日本語は難しいからやめたと言いましたね。韓国語は？難しいですか。

Anne： 実は、授業の後にはかなり長い時間を勉強に費やしているんです。仕事の後は1日か2日、週末は1日。とても時間がかかります。たくさん時間を費やします。でも、試験で良い結果が出ると、ああ続けたほうがいいなと思います。

4.2 Bell さん

Bell さんは大学の選択科目で日本語を選んだ。日本のドラマや日本旅行が好きだったことに加え、ルームメイトが日本人だったことが授業を取るきっかけだった。しかし、他の科目の勉強が忙しくて、選択科目として登録したものの、すぐにやめてしまった。その後、大学3年生のとき、語学学校で再び日本語を習い始めた。Bell さんは日本人の友達と話したり、日本のドラマを見たり、旅行で日本語を使いたかったので、

会話の上達を目的としていた。しかし、通っていた学校は文法重視で会話練習が少なく、話す力がつかないと感じた。

Bell：日本人じゃなくて日本語が話せない香港人の友達と日本に旅行したら、かれらはわたしが日本語を話せると期待するんです。でも、私は一言も話せませんでした。

筆者：それは興味深いですね。

Bell：私は学校の影響が強いと思うんです。学校での練習が。だって、私たちは口頭試験がなかったし、口頭練習もあまりしなかったんです。

そこで、Bellさんはこの学校と並行して別の会話重視の語学学校にも通った。だが、クラスの学生間のレベル差が大きく、初級のBellさんは不満だった。

Bell：学生のレベルが違いすぎて、クラスはあまり良くないと思いました。日本語を流暢に話せる人もいました。ある女の子は日本留学を予定していると聞きました。だから、レベル差が大きすぎました。私はゼロレベルでしたから、もっと基本的なことを学びたかった。でも、レベルが違いすぎたし、先生がたくさん話していました。だから、口頭能力で得るものはあまりなかったです。そして、最後は潮時だと思いました。

ちょうどこの頃、韓国ドラマをよく見るようになった。日本語が話せるようにならないことに不満を抱いていたBellさんは「全部最初からやり直したほうがいい」と考え、日本語をやめて韓国語を始めることにした。たとえ日本語を別の学校で初級からやり直しても、文法は既に知っているので「時間の無駄」だと思った。今はA学校で韓国語を勉強しており、会話も練習できるから良いと思っている。

4.3 Carmenさん

Carmenさんは、専門学校に進学することになり、自分は「話すのが好き」だから、語学が向いているだろうと考えた。そして、日本語を勉強すると香港にたくさんある日系企業に就職しやすくなるかもしれないと考え、日本語を専攻することにした。

筆者： そのときはどうして韓国語を勉強しなかったんですか？専門学校では。

Carmen： 実はしたかったんですけど、(韓国企業が)あんまりないんです。そのときは。

筆者： あ、まだ少ない。

Carmen： はい、まだ少ないですから。それで日本の会社が香港でたくさんありますから、やっぱり卒業してから就職のため、日本語を選びました。

専門学校では、月曜日から金曜日まで授業があった。最初から「あいうえお」を1日で終えるなど、勉強は大変だったが、「速く勉強できるのはいい」ことだし、「勉強が楽しかった」。香港ではなかなか日本語を話す機会がないため、「やっぱり日本へ行

かないと上手にならない」と感じ、専門学校を卒業後、大阪の日本語学校に1年間留学した。日本語学校では他の国からの留学生と日本語で話さざるを得ず、話すのが上手になった。また、日本滞在中に日本語能力試験 N1 を受けて、合格した。

香港に戻ってきてから、Carmen さんは希望どおり日系企業に就職した。仕事では日本語を話す機会はあまりないが、お客さんに丁寧にメールを書かなければならず、うまく書けないので、ビジネス日本語のクラスを取ることにした。しかし、そのクラスはあまり役に立たなかった。Carmen さんは自分で文章を考えて書く力を身につけたかったのに、授業では主にインターネットで資料を探してくる方法を習うだけだったので、期待していたものと少し違ったのだ。

Carmen さんは日本語のクラスは「もう取らない」と言う。仕事で契約書を翻訳できるともっといろいろな仕事を任せてもらえるようになると思います、翻訳のクラスは取りたいと考えているが、人気がありすぎて取れないそうだ。その他に興味があるクラスはなく、クラスを履修する必要性もそれほど感じていない。

Carmen : もう充分です。何年か勉強してですから。なんとなくできるかなあと hhh 思っ
て。

筆者 : hh、そうですね。

Carmen : 本当に足りないときは、その時は本屋で本を見てもわかるじゃない
ですか。

筆者 : 自分で。

Carmen : 自分で勉強して、はい、勉強。

筆者 : 日本語ももし自分で勉強しようと思ったらできる。

Carmen : そうです。

筆者 : ときどき今も自分でこう調べたりすることはありますか？

Carmen : ありますよ。単語わからないときもあるしー、文法もそうです、はい。わからないときは自分で本で探します。と、ネットも。

K-pop が好きになり歌詞を理解したいと思い、専門学校を卒業して日本へ行くまでの間に少し韓国語を習っていた。留学中は韓国語の学校は休んでいたが、香港に戻ってきてから再開した。K-pop への興味から始めた韓国語だったが、最近は「前のときと比べると、今、ただことば勉強したい気持ち」に変わってきたという。

Carmen : 今は、なんか年が取ったから、hhhhh、あまり？昔よりちょっと、
(K-pop に対して) まあ普通の気持ちで、hh。

筆者 : 年取ったは、Carmen さんが年取った？それとも歌手が年取った？

Carmen : 私が年取ったから、あのう、もうせっかく勉強し始めたから、やっぱり上手になりたい？そういう気持ちで、韓国語勉強してます。

韓国語を将来仕事に役立てようとは考えていないが、「能力が認められるという感じ」がするので、もっと文法を勉強して韓国語検定を受けたいと考えている。

4.4 Doris さん

Doris さんは、中学生のときに夏休みの間だけ語学学校で日本語を勉強した。ジャニーズのアイドルやドラマ、雑誌が好きだったので、それらをわかるようになりたいと思ったのがきっかけだ。

そして、大学に入って「日本語勉強するともっといい会社へ就職できるかな」と思い、日本語を専攻した。それに、ドラマで見ていた日本へ留学するのも夢だった。そして大学3年生のときに1年間日本へ留学した。留学中は日本語が「はやく上手になって、日本人の友達もできて楽しかった」。

就職活動では日系企業にも応募したが、書類作成など「つまらない仕事」しかさせてもらえないようだったので、将来のキャリアに役立つ仕事がある会社に入った。

筆者： じゃあ今のほうがもっと、まあもっと将来の役に立つ？

Doris： はい。

筆者： どんな仕事なんですか？事務じゃない、営業？

Doris： あー、中国の、えー…なんていう、えー 中国のお客様を調査しますから、中国や中国人のお客様から学ぶことができます。だから、将来のキャリアを考えるとこちらのほうがいいんです。

筆者： ああ、日本のカルチャーより中国のカルチャーのほうが

Doris： 香港ではとても大切。

日本語を仕事で使う可能性はなくなったが、大学では日本語能力試験 N2 までしか合格しなかったので、せっかくなら N1 にも合格したいと思い、語学学校の N1 対策クラスで勉強を続けた。このクラスでは毎回5つほど文法を習い、とても面白かった。授業に加えて、自分でも参考書を買って勉強した。そして、一発で合格した。

N1 に合格してしまうと、日本語を勉強する目標がなくなった。また、勉強できる場所もわからなかった。

筆者： 1級 (N1) を取ったあとのゴールは

Doris： そのゴールは、hh、なかったから、韓国語 hh 勉強しました。

筆者： じゃあ目標も終わったから。

Doris： でも、授業もなかった、あんまり1級の後のクラスがなかった。

筆者： クラスがなかった。

Doris： どこで勉強するのがわからないので。

Doris さんは、ちょうど N1 に合格した辺りから、少女時代という韓国のアイドルグループが好きになった。そして、だんだん韓国語に興味が出てきた。日本語は、自分でドラマを見て続けられるので、韓国語を勉強することにした。

筆者： 日本語はもうぜんぜん勉強していませんか。

Doris： うーん、ドラマとか見えています。はい。

筆者： 文法とか言葉とかはあまり。

Doris： hh、あまり。

筆者： じゃあ、もうそういうのを勉強したい気持ちはもうあまりないんですね。

Doris： そうですね。もう満足。

韓国語も仕事では使わないので、「興味だけ」で勉強している。ドラマがわかるようにしばらく勉強を続けるつもりだ。

4.5 Emily さん

Emily さんは「日本のドラマが大好きで」、字幕なしで見られるように日本語の勉強を始めた。次第に日本へ旅行したり日本人の友達ができたりして、ドラマ以外にも「次第に興味を持って」いった。日本語は 10 年以上ずっと A 学校で学んでいる。A 学校は宿題があるので勉強できるし、Emily さんは「負けず嫌い」だから試験のためにも一生懸命勉強した。また、うちでは「まるで日本」にいるように、毎晩ドラマを見たりラジオを聞いたりしていた。そして、気になった表現をメモして調べたり繰り返して言ってみたりしていると「だんだん日本人ぽくなるって（感じて）嬉しかった」。学校で勉強する日本語と「日常生活（で使われる日本語）はちょっと離れて」いるが、「学校行かないと、日本語の文法とかわからない」と思っている。

このようにして 10 年ぐらい A 学校で日本語を学んできたが、そのうち取りたいクラスがなくなってしまったので、A 学校の友達と二人で家庭教師の先生に日本語を習うことにした。

筆者： それはどうして A 学校をやめて、その先生に変えたんですか？

Emily： いや、最後の、あのう翻訳とビジネス（のクラス）。あとは、ドラマ（のクラス）もあったけど、昔のドラマですから、ちょっと興味がまいちな感じ？ですから、hhh。うーん、続けるのはなれなかった。

筆者： じゃあ、もう家庭教師のほうが

Emily： そうそうそう。だいたいお喋り会とか、みたいな？

筆者： あ、でも勉強にはなったですか？そのお喋り会

Emily： そうですねー。せめて会話は、今もうできる、hh、から、あのう、たぶん毎回、一つや二つの表現を覚えるなら、いいだと思いますね。

テレビや雑誌を教材として家庭教師とお喋りし、表現をいくつか覚えるというスタイルで 3 年ぐらい続けた後、「教材が少なくなって」終わりにした。その頃、友達が

マンションの隣の部屋に住む日本人と親しくなり、「じゃあ、お茶会でもやろう」ということになった。今はその日本人とときどき会ってお喋りをしている。だから、Emilyさんとしては日本語学習をやめたという意識はない。

筆者： 家庭教師をやってる間ぐらいに、韓国ドラマに興味を持って、そのあと韓国語に変えた。

Emily： そうですね。でも、今も友達の家で日本人の友達があの、会話を続けるからー、まあ、やめるわけではないですよ hhhhhh

筆者： あー、じゃあ別に自分の中では日本語をやめて韓国語じゃなくて
//Emily： そうそう//、まあ家庭教師はしないけど、自分で話したり
//Emily： そうそうそう//、うーん

Emily： 今も日本語のドラマを見たり、面白い台詞があったら繰り返します。

筆者： じゃあもう学校へ行く必要がないということですねー。

Emily： 私の場合は今ですね、文法はだいたい習ったことがあるから、学校は行かなくても大丈夫かなあと想着。

Emilyさんは日本語を「ただのレジャー」として学んでいるから、今後学校でクラスを取るとしても、文法を学ぶようなクラスは必要ない。

筆者： そっか…じゃあ将来日本語を学校で勉強する予定ももう別にないですか。

Emily： いや、もしたても面白いクラスがあればー。たぶん。

筆者： あー、どんなクラスだったら面白いですかねえ？

Emily： 料理のクラス、ありますか？

筆者： 料理はねえ…面白そうですねえ……。じゃあやっぱり興味があるクラスが欲しい。//Emily： うーん// そのクラスは文法よりー

Emily： もっと軽いもの？

筆者： 軽いものもいい…。じゃあ、行ってこう楽しく日本語を話しながらー

Emily： そうそうそう、試験は要らない、hhhhh。

家庭教師が終わり「新しいものを勉強したい」と思ったEmilyさんは、当時韓国ドラマをよく見ていたことから、韓国語を習い始めた。昔は韓国語を聞くと「うんざりだと思った」り、「嫌な感じがあった」が、勉強しているうちに「だんだん大丈夫になった」。韓国人の友達もできて親切にしてもらい、韓国語を勉強していて「いいことあるかな」という気持ちに変わってきた。ただ、これまで週1回だったクラスが、次のレベルでは週2回に増えるので、「ちょっと厳しいなと思って」来年はとりあえず学校を「ちょっと一休憩」しようと思っている。

5. 考察

調査の結果、協力者達は韓国語学習を始めるために日本語学習をやめたわけではないことがわかった。AnneさんとBellさんは、日本語の難しさ・仕事の忙しさ・望む力が身につかないという挫折を経験して、まず日本語学習をあきらめていた。その後、言語学習のやり直しとして韓国語を選んだのである。Carmenさん、Dorisさん、Emilyさんは、自身の日本語能力にある程度満足し、学校での日本語学習をやめ、日本語に代わる言語として韓国語を選択した。彼女らにとって、韓国のポップカルチャーは韓国語選択の誘因とはなっているが、日本語学習をやめることに直結はしていない。日本語教育関係者の間で懸念されているように、韓国語学習人気が日本語学習を継続するかしないかに直接影響しているのではなく、何らかの理由で日本語学習をやめたことをきっかけに韓国語へ移行しているに過ぎないのである。

では、かれらの日本語学習を私達はどのように支援していくことができるだろうか。協力者達のストーリーを日本語学習をやめた時点に注目しながら見直そう。

- Anneさんは仕事の忙しさから勉強時間が確保できなくなり、授業についていけず語学学校をやめた。
- Bellさんは会話の上達を望んでいたが、文法重視の学校やレベル差の大きい学校ではそれが叶わないと感じ、日本語学習を断念した。
- Carmenさんも、仕事で必要な日本語のスキルは学校で得られず、他に取りたいクラスも無かったため、必要なことは自分で勉強していくことにした。
- Dorisさんは、日本語能力試験N1合格後はドラマを見ることで日本語を継続することにし、教育機関での学習は終えた。
- Emilyさんは、語学学校で興味があるクラスがなくなり、家庭教師や日本人の友人とお喋りを通して日本語を続けている。

つまり、彼女らが日本語教育機関での学習を継続していたのは、日本語学習を投資あるいはシリアスな余暇活動として捉えていたときであり、個人的な学習目的やライフサイクルと教育機関での学習が合致しなくなったり (Anne、Bell、Carmen)、カジュアルな余暇活動として日本語学習を捉えるようになったとき (Doris、Emily)、日本語教育機関をやめている。

したがって、彼女たちの日本語学習継続を支援するためには、まず学習者の学習目的や生活スタイルを考慮した学習機会を提供することが重要である。例えば、仕事の忙しさから日本語学習を諦めたAnneさんのような学習者には、緩やかなカリキュラムや自分のペースで学習を進められるラーニング・センターの整備など、ライフサイクルに合った学習支援が考えられるだろう。また、個人的な学習目的と教育機関での

学習に乖離があった Bell さんや Carmen さんのような学習者へは、教育機関や教師が学習目的を予め把握し学習中も学習状況をモニターできるシステム作りや、個別化教授法 (Tomlinson, 2004) を教師が身につけることが有効だろう。

次に、カジュアルな余暇活動への支援を充実させることも重要である。Doris さんや Emily さんが教育機関をやめた後に行っているドラマの視聴やお喋りは、必ずしも言語能力向上のみが目指されているわけではなく、一見すると“学習”には見えないかもしれない。だが、近年は規範的な言語知識の獲得や正確性の向上のみを言語学習と捉えることが疑問視されてきており、「本質的、固定的、多義的、流動的な言語や文化理解が交錯する中で自己の立場や言葉やアイデンティティを模索することができる能力」(尾辻, 2011, p. 28) を実践を通して学んだり、「自己変容の発見に出会い、その社会で生きることに自己の立場を明確にすること」(細川, 2007, p. 12) が言語学習であると考えられるようになってきている。言語学習をこのように捉えると、お喋りやドラマの視聴も学びにつなげられる可能性があるとは言えないだろうか。久保田他 (2014) は、香港の社会人教育機関で言語能力伸長を目指したカリキュラムが実施されていることを指摘しているが、日本や日本語をめぐる人々や営みが出会い対話する場を積極的に創出し、充実させることによって、言語面に留まらない学びも広げ深めることができるのではないだろうか。例えば Emily さんの場合、日本語教育機関が料理教室と協働し、料理を介して他者と交わったり料理をめぐる文化を多様な視点で捉えたりする場を作り出すことが考えられる。日本語教育者はこのとき言語知識や技能の育成者だけではなく、場のデザイナーや、思考や感情を掘り起こしたり内省を促したりするファシリテーターの役割も担うことになるだろう。

学校教育機関以外で生涯学習として日本語を学ぶ者が多い香港では、様々な生活を送る学習者があり、日本語学習の意味づけも多様で、大きく変容することも多い。かれらの生涯にわたる日本語学習を支援していくためには、様々な学びのありかたを認め、柔軟な日本語教育を目指さなければならない。そのなかで日本語教育に携わる者に求められているのは、言語習得のみを目指す日本語教育からの脱却ではないだろうか。筆者は本調査を通して、自身が無意識に抱いていた日本語教育の姿を自覚するようになった。日本語教師として言語教育機関で教えてきた筆者は、言語習得を第一目的として行う営みが日本語教育であるというイメージを抱いていたため、協力者達は日本語学習を“やめて”韓国語へ移行したと考えていた。それゆえ、Emily さんに「料理のクラスはありますか」と聞かれたときに一瞬戸惑ってしまったのである。しかし、Emily さんにとって、日本語学習とはただ言語を習得するのではなく、日本語を用いた様々な活動を他の人々と楽しむことであった。筆者の日本語教育に対するイメージ

は、彼女らの今も続く学びとその先にある可能性を覆い隠していたのである。筆者の持っていたイメージは筆者だけが抱いていたわけではなく、尾辻(2011)や細川(2007)が問題提起しているように、日本語教育においては広く流布しているものであると考えられる。

生涯にわたる日本語学習を支援するためには、教室空間で知識や能力を教えるという営みに閉じるのではなく、教室を超えた学習環境の整備や言語能力の習得を第一義としない学びの支援を考えることにも積極的に関わる必要がある。学習者の多様な学びを受け容れ、日本語教育という営みを柔軟に捉え直すことによって、言語学習において重要とされつつも脇に置かれがちだった学習者のアイデンティティや情緒的側面にも対応し、日本語教育が言語能力の育成だけではなく、新たな役割を通して社会に貢献できる可能性が開けるだろう。

6. むすびー多様な日本語学習を支える多様な日本語教育に向けて

本調査は、学習者が日本語をやめて韓国語に移行したという前提で開始した。だが、調査の結果からは、現在も日本語をめぐる学びを継続している調査協力者もいることがわかった。学習者はそれぞれの言語をめぐり、多様な学びを展開している。教育機関で学ぶ学習者の増減のみにとらわれるのではなく、学習者の行っている様々な学びをいま一度見つめ直し、かれらにとって実りある学びを深める支援を行うことが、私達言語教育に携わる者の責任ではないだろうか。

※ 本稿は、2014年11月に開催された第10回国際日本語教育・日本研究シンポジウムでの瀬尾匡輝・室田真由見両氏との共同発表を基点とし、データを再分析したものである。二名の査読者に加え、本研究の様々な段階で、瀬尾匡輝氏、室田真由見氏、米本和弘氏から有益で建設的な意見をいただいた。深く御礼申し上げる。

参考文献

- 秋田喜代美・藤江康彦（編）『はじめての質的研究法 教育・学習編』東京図書。
- 宇田川洋子他（2014）「香港の日本語学習者減少の要因」『日本学刊』17, 106-120.
- 尾辻恵美（2011）「メトロリンガリズムと日本語教育」『リテラシーズ』9, 21-30.
- 久保田竜子他（2014）「余暇活動と消費としての日本語学習」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会（編）『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』（pp. 69-85）ココ出版。
- 国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状』くろしお出版。
- 瀬尾匡輝（2011a）「香港の日本語生涯学習者の動機づけの変化」『日本学刊』14, 16-39.
- 瀬尾匡輝（2011b）「香港の上級の日本語生涯学習者の動機づけ」『アジア日本研究』1, 11-25.
- 瀬尾匡輝他（2012）「なぜ日本語学習をやめてしまったのか」『日本学刊』15, 80-99.
- 瀬尾匡輝・山口悠希子（2014）「インフォーマル・ラーニング下における日本語学習」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会（編）『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』（pp. 87-99）ココ出版。
- 細川英雄（2007）「新しい言語教育をめざして」小川貴士（編）『日本語教育のフロンティア』（pp. 1-20）くろしお出版。
- 三國喜保子（2013）「香港における日本語の民族言語的バイタリティー」『言語教育研究』3, 53-62.
- 宮副ウォン裕子・鈴木東・石秋炯（2003）「香港における日本語の社会言語的地位」香港日本語教育研究協会（編）『アジア太平洋地域における日本語教育と日本研究』（pp. 344-347）向日葵出版社。
- 森岡正芳（2013）「ナラティブとは」やまだようこ他（編）『質的心理学ハンドブック』（pp. 276-293）新曜社。
- Aoki, N. (with Kobayashi, H.) (2009). Defending stories and sharing one. In Pemberton, R., Toogood, S. & Barfield, A. (Eds.), *Maintaining Control: Autonomy and Language Learning* (pp. 199-216). Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Bruner, J. (1986). *Actual Minds, Possible Worlds*. Harvard University Press.
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation* (2nd ed.). Harlow: Longman.
- Kim, H. K. (2010). Korean Language and Korean Studies in Hong Kong (1989-2009). *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 7(Suppl. 1), 141-153.
- Kubota, R. (2011). Learning a foreign language as leisure and consumption. *International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 14, 473-488.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: Gender, ethnicity and educational change*. Harlow, UK: Longman/Pearson Education.
- Polkinghorne, D. E. (1995). Narrative configuration in qualitative analysis. In J. A. Hatch & R. Wisniewski (Eds.), *Life history and narrative* (pp. 5-23). London: Falmer.
- Stebbins, R. A. (2007). *Serious leisure*. New Brunswick, NJ: Transaction.
- Tomlinson, C. A. (2004). *How to differentiate instruction in mixed-ability classrooms* (2nd ed.). Upper Saddle River, NJ: Pearson.